

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

令和 4 年の輝かしいお正月を、ご家族お揃いで清々しくお過ごしのことと、衷心よりお慶びを申し上げます。

昨年の自衛隊関連行事等は、猖獗を極めた「新型コロナ肺炎」流行に伴い、全て部内者のみでの開催となり、我々には一切お声が掛からずに誠に残念でした。

今年こそはと切齒扼腕していた矢先、例年 1 月中旬に予定されていた「えびの駐屯地・新年賀詞交換会」も、昨年末に中止のご案内が届き、またもやと大変気落ちしたところです。

英米等の罹患者数等と比較すると、日本は遙かに軽微で流行とも云えぬような状況ですが、正体不明の「オミクロン株」等が再び跳梁跋扈せぬよう、慎重に慎重を期しているのでしょう。

年末年始に伴う帰省や観光等の人流の影響が懸念されますが、国民に出来る「三密回避・手指消毒・マスク着用&ブースター接種」のルーティンを遵守・励行して「With Corona & New Normal」を慣習化すれば、自ずと沈静化に向かい自衛隊各種行事等のご案内も届く事かと思われます。

さて昨年の衆議院総選挙の結果を受けて、新聞には「改憲勢力足並み、立民孤立。憲法審査会の分科会提案」等の見出しが踊り、いよいよ「憲法改正」の実現が近づいて来ているようです。

立憲・共産の選挙協力の本質を見破った日本国民の約 70%は「憲法改正」を望んでおり、更に 95%の大多数は自衛隊を支持・容認している現状を鑑みて、憲法改正を党是とする岸田総理率いる自民党の「自衛隊明記や緊急事態条項」等の改憲に対する本気度が愈々試されます。

そんな中、年末に安倍元総理が「台湾有事は日本有事」と至極当然の事を発言・指摘した処、中国共産党が「内政干渉」と過敏に反応して物議を醸しているようですが、小川先生の鋭い分析がメルマガに掲載されましたので、お許しを得て転載させていただきます。

・交渉したいと中国は強気に出る

これまで、台湾への中国の軍事侵攻を前提とする**武力統一**について、中国軍の上陸作戦を成立させる条件の欠如(輸送能力、台湾本島の上陸適地、台湾封鎖など)の面から**否定的な見解**を示してきました。それとは違う角度ですが、米国のヘンリー・キッシンジャー元国務長官からも同様の見方が示されています。キッシンジャー氏はニクソン大統領の「密使」として極秘に訪中、米中和解を実現した立役者として知られる存在です。

「米中の国交正常化交渉に深く関わったキッシンジャー元米国務長官(98)は 21 日放映の米 CNN テレビの番組で、中国による台湾侵攻の可能性について『台湾への全面攻撃は、恐らく 10 年間はないだろう』と述べた。米中関係について『対決回避という原則を持つべきだ』と訴えた。

キッシンジャー氏は台湾情勢について『対立が深まれば、中国が台湾の自治を弱める措置を取ることは十分に考えられる』と指摘。その中国の『措置』を軍事的と見なすか、政治的と見なすか、米国は難しい判断を迫られると強調した」(11 月 23 日付毎日新聞)

この記事だけでは、キッシンジャー氏が根拠とする部分がはっきりしないのですが、手もとの『キッシンジャー秘録』などを眺めると、中国を戦略的に眺め、トップ交渉を行ってきた経験をもとに、中国の思考と行動の様式を把握している様子がわかります。

ひとことで言うなら、中国が攻撃的な行動を見せたときは、必ず交渉したいテーマがあり、相手を交渉のテーブルに着かせるためには、たとえ局地戦で敗北を喫しようとも、軍事力を行使する場合もあるということです。

その思考と行動の様式は、朝鮮戦争、金門島砲撃、珍宝島(ダマンスキー島)事件、中越戦争などに如実に表れています。

もちろん、その思考と行動の根底にあるのは古代中国の戦略の書『孫子』であることは言をまちません。

孫子の至言のうち中国が重きを置いているのは「戦わずして人の兵を屈するは善の善なる者なり」であることは明らかです。

戦わずに勝利、あるいは引き分けを勝ち取るためには、場合によっては局地的な負け戦も辞さないというのは、驚くべき戦略的発想です。

そこで日本の領土であり、中国が領有権を主張している尖閣諸島ですが、その中国が目指しているのは領有権問題の「事実上の棚上げ」です。

4 隻編成の**海警船のうち 1 隻しか武装せず**、**日本漁船**についても「**あおり運転**」こそしても、自国の領海法に基づいて**拿捕**することを**避けている**のは、わざとそうしているからです。世界的な戦争にエスカレートする火種を内包している日米との衝突は避け、いわば「**根負け**」した**日本を交渉**に引きずり出し、「**事実上の棚上げ**」に持ちこもうという計算された動きと見てよいでしょう。

日本としては、そんな中国の思考と行動の様式を理解したうえで、海上保安庁の増強と海上自衛隊との連携の強化だけでなく、**禁反言**の法理に基づく領有権の主張、**実効性のある領海法の制定、漁業協定の改定**を、こちらも戦略的かつ同時進行で進める必要があるのです。それが**台湾有事に対する抑止効果**を高めることを忘れてはなりません。

(小川和久)

偽りの中国四千年の歴史の中でも「孫子の兵法」だけはどうか本物らしく、歴史的に高名な軍略家も一度は目を通すと云われるほどの名著だそうです。その中でも私が知っているのは「己を知り、敵を知り、闘わば百戦危うからず」や「闘わずして勝つ」とか、或いは些か出典が怪しいかも知れない「三十六計逃げるに如かず」等の、皆さんも既にご承知の訓えの数々です。

小川先生の分析に従えば、「大きな勝利を収める為には、小さな敗北も敢えて辞さず」という遠謀深慮が中国共産党には昔からある訳で、中でも 1989 年鄧小平氏講話の「**韜光養晦**」が余りに有名なのですが、その意味するところは「**爪や才能を覆い隠し、時期を待つ戦術**を形容する為に用いられてきた」との説明がありました。

この「**韜光養晦**」は鄧小平が云ったのではなく、1992 年江沢民が第 9 回駐外使節会議の場で発言したと云う記録が残っており、2010 年の中国外交は 1. アメリカと対立するな。2. 国際システム全般に挑戦するな。3. 外交政策をイデオロギーで決めるな。4. 「**反欧米陣営**」のリーダーとなるな。5. たとえ自分たちが正しくとも、多数の国と対立するな。6. 妥協や譲歩を学び、相互利益の駆け引きをおぼえるように。7. 国家統一に関する中国の確信的利益について妥協するな。8. 何かを必要としている国際社会の場には公共財を提供するように。9. 重要な国際イベントを活用して中国の国際的イメージを変えよう。等の穏健な 9 の主要政策提言を掲げたそうです。

しかし 2008 年に大転換した中国は、その後 20 年以上爪を隠し乍ら軍事費を 10%以上増額し続けた結果が「**韜光養晦**」の正体で有り、日本政府と日本国民はそれに気付かねばなりません。

今年こそ憲法改正の正夢を見たいと念じつつ、皆様また 1 年宜しくお付き合い下さい。

令和4年正月元旦

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小 倉 和 彦